

囲碁に学ぶ大局観(シリーズ)

第6回：融通無碍

融通無碍(ゆうづうむげ)とは、行動や考えが何にも捉われず、自由に伸び伸びしている様を言います。鎌倉時代初期の道元禅師の教えに、“水が清らかで、妨げるもののない融通無碍なるものであるように、人も自我意識や所有欲に駆られ、本来自由なものに執着することによって、氷のように不自由な状態にしてしまう。しかし、その氷も水であることに変わりなく、水を離れての氷は存在しない”があります。一部の英才や俊才を除き、私たちの多くは日常における思考や発想の自由度を自ら抑制してしまう呪縛から逃れられない性(さが)を持っているのかも知れません。

中国の古典的な棋書・玄玄碁経(南宋時代の著書)の序章に、虞集(ぐしゅう: 儒学者)の次のような名文があります：“そもそも碁と言うものは、その形象からして天の円く地の角に似せて作られており、黑白の争いには自ずから天地陰陽動静の道理が働いている。打ち進められた盤面には天上の星の如く秩序整然たるものがあり、局面の推移は風雲の如く変化の機運に富んでいる。……全局を通じて変化し流れ行く様は恰も山河が表裡をなして様々な容相を呈するが如くである。そうだと見れば、人の世の道義や浮き沈みと言うものも、一つとして碁になぞら得ぬものがあるだろうか”。まさに、道元の教える水の融通無碍と一なるものであります。

また、江戸初期の禅僧・澤庵宗彭は、その伝記『不動智神妙録(*)』を著しています。これは、“剣禅一致(剣法と禅法的一致)”を説いたもので、徳川將軍家の剣術師範・柳生宗矩(=佐々木小次郎と同一人物?)に授けたとされています。不動智には、“水上打胡蘆子、捺着即転[水上に胡蘆子(ころす=瓢箪)]を打つ、捺着せんとすれば即ち転ず。即ち、水の流りに瓢箪を投げ、それを押すと、ひょっと脇へ逃げ、どうしても一つ所に止まらぬもの”と禅の心を説いたものです。剣法とは無縁であるはずの禅僧が、剣の達人に与えた極意とは、何事も融通無碍に、即ち、固定観念に囚われず、如何なる状況にも柔軟に考え、行動することが肝心という道理です。沢庵は、『太阿記』も残しており、仏法を通じて兵法の意義と兵法を超えた人間の根源的主体の重要性を教えています。

(*)不動智神妙録(講談社刊、市川白弦氏解説)に、“……諸仏の不動智……不動と言っても、石や木のよう、全く動かぬという意味ではない。前後左右、四方八方へ心は自由に動きながら、いささかも捉われぬのが不動智……”。剣法で言えば、“……相手が斬りかかる太刀の切先を見て、そこに太刀を合わせようと思えば、相手の太刀に心が止まり、自らの働きに気が行かず、逆に相手に隙を与えるもの……”。

戦(いくさ)の要諦として、孫子もその兵法の第七(軍争篇)において、“その速きこと風の如く、静かなること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如く対処せよと言う、所謂風林火山の戦法の有効性を論じています。動・静・攻・守の状況に応じて自在に変化し、困難な局面を有利に導くために発想を転換せよと言う趣旨です。つまり、軍事行動は敵を欺く(競争相手の考えの裏を知る)ことを基本とし、利得(勝つこと)にのみ従って行動し、分散・集合を融通無碍に行うべしと言う教えであり、急がば回れの諭でもあります。

この融通無碍の境地は、ヘボ碁を自認する筆者にとって理想郷であります。囲碁対局前にはいつもそのことを心で念じながら臨んでも、いざ打ち進むにつれ、局前の思いが無残に打ち碎かれ

るのが常であります。思いとは逆の発想の着手をしたことに呻吟し、眠れぬ夜に悩まされることとなります。

何事にも融通無碍の境地で、常日頃考えに考え抜く習慣を身につけることによって、第六感(理屈では説明しがたい、鋭くものごとの本質をつかむ心の働き)によって迸(ほとばし)る天啓を得たいと切望するものです。その結果として、一目でも棋力が向上し、加えて脳機能の維持向上に繋がります、加えて同志の輪が広がることにも繋がればこの上なき喜びです。

プロ棋士の対局や棋譜を拝見していると、盤上を覆う対局者の融通無碍の境地が感じられます。特に序盤の着手一手一手の閃きには、大胆さと細心さの絶妙なバランス感覚の凄さがあります。九段・允許状にありますように、“神域”に達した棋士ならではの戦いだからでしょう。この境地は、領域を問わず「こと」を成した人に共通する才覚であると思います。科学、芸術、スポーツ、政治、企業経営などに思いを馳せた時、それぞれの領域には必ず我々の心に浮かぶ名前があります。彼らはいずれも「こと」を成した異才です。そして沈思黙考し、融通無碍の境地に浸り、他者より抜きん出てその道を極めるというビジョン達成が体現されています。

脳科学者のおっしゃるように、囲碁は幼少期から始めなければ上述の境地を知ることは至難の業とご見識は、人の一生の中で左脳・右脳の調和の取れた発育が最も顕著となる時期だからという根拠からもごもつとも思います。また、自我意識や高次の欲求(自己実現の欲求)に目覚め、それらを充足させ得る最適だからとする心理学者のご高説も理解できます。しかし、こうした姿勢を心掛けること自体が、年齢や棋力に関係なく囲碁を愛する全ての人の棋力をそれなりに向上させると信じますし、脳の諸機能を刺激し、劣化速度を抑えることにも繋がると確信するものであります。

柴田いさを氏の川柳、“涼しさは碁石置く前の碁盤の目”が心に留まりました。

<以上>

2011年10月

足立敏夫

「囲碁と経営」研究家